

第4章 閉会の挨拶

副所長 三宅 光一

第4章 閉会の挨拶

(副所長 三宅 光一)

皆さま、こんばんは。副所長を拝命しております三宅と申します。

2016年も師走に入りました。そうした年末の忙しい中、大変多くの皆さまにご参加いただき、本当にありがとうございました。事務局から聞きますと、昨年を超える600名強の方々にご参加いただいたとのこと、そして、今日は、朝から夕方まで長い時間ご聴講いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

今回、16回を迎える国総研報告会でしたが、メインのテーマは災害、あるいは防災・減災の話であったかと思います。昨年の熊本地震の一報を聞いたとき、私は熊本出身で“熊本で地震が起こるはずがない”とすっかり思っていただけに、非常に驚きました。ただ、そうしたところにも来てしまう。災害は、どうしてもなくなりませんし、そうした自然の破壊力というか、予想もつかない動きなり、そうしたことにあらためて自然の偉大さを感じる次第です。そのような意味で、やはり、私ども、自然に学び、謙虚でなければならないと思いますし、その上で、人の命を守る、財産を守る、そのために、きちんと地道な調査研究を重ねていくことが私ども研究所の役割、機能ではないかと思っております。そうした意味で、今日、特別講演をいただきました久保先生のお話には、非常にご示唆の富むところがございます。あらためて感謝を申し上げたいと思います。

それから、最初の所長の挨拶にありましたイノベーションについてです。どうやってイノベーションを起こしてか。私は、一つ、重要なキーワードとして、“つなぐ”とか“つながる”というのがあるのではないかと思います。異なる分野、異なる技術がつながる、あるいはつながっていく。異なる他の分野の技術者たちがつながるとか、あるいは技術が社会とつながるとか、あるいは技術をきちんと次世代につなげていくとか、そうした“つなぐ”という機能、これは非常に重要なことだと思いますし、そうしたことを通じて、イノベーションが生まれるのではないかと思います。この意味で、“つなぐ”機能のプラットフォームが、土木建築の技術分野では、まさに国総研であると考えてるわけで、このような機能をしっかり果たしていきたいと思います。

研究とはいえ、現場が大切です。ここにお集まりの皆さま方、それぞれに現場を抱え、最前線に立ってご苦労されていると思います。皆さま方のご意見、あるいはご提案などを頂戴し、対話を続けながら、国総研としてもしっかりやっていきたいと思っております。

最後になりましたが、皆さまのご健勝と、ますますのご発展、それからまた、新しい年、良い年を迎えられますよう祈念して、閉会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。